

外務大臣賞・会場審査員賞

「若者・馬鹿者・よそ者」

サミーラ グナワラデナ

Mr. Sameera GUNAWARDENA
(スリランカ・研修生)

6年前に留学生として来日。現在、島根県の離島、隠岐海士町に住み観光協会で働いています。将来は、スリランカで日本文化を紹介する仕事をしたいと思っています。



私は今、日本の観光協会で働いています。

お客さんに民宿を案内するとき、「お客様、携帯の繋がる民宿と、繋がらない民宿、どちらにいたしましょうか？」と聞きます。私が働いている所には、携帯の繋がらない民宿もあります。携帯が繋がらない民宿で、日常から離れてゆっくりしたいお客さんもいらっしゃいます。すごい離島にあるんです。

その離島は、「海士」と言います。「海」に武士の「士」と書いて「海士」と読みます。島根県にあります。島根県は、「日本人がどこにあるか分からない県 No.1」の県で、山陰にあります。その島根県の日本海沖、60キロくらいのところに隠岐諸島があり、その中に海士町があります。後鳥羽上皇が島流しされた場所です。

6年前に留学生として来日した私は、大学卒業後、東京で会社員をしていたある日、「面白い島があるよ」と聞いて、初めて海士に遊びに行きました。その時の私は、東京の会社で、仕事の面白さを実感できずに、「仕事なんてこんなもんさっ！」とくさっていました。そんな私は、海士で、役場の研修生募集に会いました。「この島で宝探しをしてみませんか」私はそれにすぐにひっかかって、海士で仕事をすることにしました。

私は、「若者」「馬鹿者」「よそ者」だったんです。実は、この言葉は海士の町長さんの書いた本の中にある言葉です。海士町では、『若者』『馬鹿者』『よそ者』がいれば町は動く」と考えて、町おこしをしていたところでした。分別のある大人ではなく、まさに、私みたいな、エネルギーだけ持て余して、向こう見ずに調子に乗って飛び込む、「よそ者」の視点を持った人を求めているのです。

海士の職場に行ってみたら、机の上にパソコンが一台あるだけでした。職場の窓から海と山が見えました。海は静かで、「鏡のようだ」と小泉八雲が表現した入り江が、青い空を映していました。「自由にやってくれ」とだけ言われた私は、全く仕事の指示がなく本当に苦しかったです。原付でふらっと出掛けて、「この島ってどこに人がいるのかなあ」と思って走りました。何をしたいのか分らず、とりあえずは、ただただ島をグルグル回って過ごしました。そのとき見たのは、毎日毎日、漁に出かける船、畑でがんばっているじっちゃん、ばっちゃんでした。

役場の先輩とイモ掘りの手伝いに行ったとき、初めて「じげもん」で作った「爆弾おにぎり」を食べました。「じげもん」というのは、「地元の物」で、「爆弾おにぎり」は、外の仕事の時食べるでっかいおにぎりのことです。「こんなに美味しいもの毎日食ってんの？ ぜいたくだなあ〜！」と、うまいものを食べていなかった「よそ者」「若者」の私は思いました。

島の人が当たり前のように飲み食いしている「うまい宝」はまだありました。魚のアラの煮付け、山菜の天婦羅、なまこの酢の物、肉の代わりにサザエを入れたカレーライス……。それに、船の上で食べるイカ刺しは最高です。祭りの後の打ち上げで、漁師のたくましいじっちゃんたちから「飲め飲め」と酒を勧められて、酔いつぶれて、気がついたら朝だったこともあります。

離島の暮らしは厳しくて、時化の時、海士は、完全に孤立してしまいます。でも、島の人たちは、持っているものを融通しあって、おかげさま、お互いさまの精神で生きています。季節ごとにやるべきことが分っていて自然と共に生きています。「山が荒れると海も荒れるから」と言って、漁師さんが山に木を植えています。風土がこの人々を創り上げたのでしょう。この人々の知恵こそが、本当の宝なのです。

私は、島の子供たちと英語キャンプをしたり、「国際化」についてエッセイコンテストを企画したり、スリランカ行事体験ツアーを企画したり、何でもかんでも挑戦しています。失敗することもしょっちゅうです。

ある日、私は島で新しい宝を発見したんです。

スリランカでは「ゴッコラ」と言う有名な若返りのハーブが、島に生えていたんです。島の人々は、ただの草と思って誰も食べていませんでした。今、このハーブで商品開発をすることが私の夢です。

「よそ者」だった私は、よそ者の視点・発想を持ち続けたまま、もう今は「よそ者」ではなく、海士は私の居場所になりました。人は縁あって住むことになった場所で、一所懸命に生活することで居心地のいい場所を作ることができるのだと知りました。

最近では、スリランカの親戚の名前や顔も忘れてしまいました。「あのばあちゃん亡くなったよ。あなた子供のころよく可愛がってもらっていたじゃないの」と言われても思い出せなくて、スリランカの母に怒られることもあります。でも「スリランカ」は自分の国だ」という気持ちは、ずっと心の根っこに持っています。海士での宝探しの仕事を通じて、「よそ者」の視点や発想があれば、20年にも渡る内戦で荒んだスリランカでも、新しい宝を発見できるのではないかと考えるようになりました。海士のおかげで、スリランカに恩返しできる方法を知りました。

私は、いつまでも、年をとっても「若者」で、フレッシュな発想が出来る「よそ者」で、お調子者の「馬鹿者」として挑戦して行きたいと思います。